

古代遠江における平瓦と丸瓦

武田 寛生

要旨 古代の寺院跡や瓦窯の発掘調査で、最も多く出土する瓦は平瓦と丸瓦である。しかし、静岡県における古代瓦の研究は、軒丸瓦・軒平瓦を対象とするものが主流であり、近年資料数が増加しているにも関わらず、平瓦と丸瓦に関しては、未だ不明な点が多く残されている。本稿では、県西部にあたる遠江から出土した平瓦と丸瓦を対象に、製作技法などから分類を行い、その年代や分布の特徴を明らかにした。

キーワード：遠江 平瓦 丸瓦 製作技法 分類 変遷

1 はじめに

古代寺院の屋根を覆う瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦・鬼瓦などの様々な瓦が使用されるが、その大多数を占めるのは、平瓦と丸瓦である。実際、寺院跡や瓦窯跡の発掘調査において、数百箱以上にも及ぶ膨大な数の平瓦と丸瓦が出土することもさほど珍しいことではない。

代表的な研究としては、平瓦は佐原真氏の「平瓦桶巻作り」(佐原1972)、丸瓦は大脇潔氏の「丸瓦の製作技術」(大脇1991)などがあり、各遺跡の発掘調査報告書でも主に製作技法の観点から詳細な分析が行われている。

静岡県では、軒丸瓦と軒平瓦を対象とする研究が主体ではあるが、平瓦と丸瓦に関しても調整技法の違いなどから分類し、報告される事例が増えている。しかし、これらの分析は、遺跡や報告書ごとに行われるに留まっており、全体の様相となると依然漠然としており、地域的な特色も不明瞭なままである。

そこで本稿では、遠江地域出土の平瓦と丸瓦を対象に、その年代や分布の特徴を明らかにしたい。なお、遠江国分寺跡については、史跡整備に伴う発掘調査が進行中であり、今後より詳細な調査成果が報告されることが予想される。不十分な情報による分析はかえって混乱を招く恐れがあるため、本稿では主に国分寺建立以前の瓦を対象にし、国分寺瓦は除くことにする。

2 各遺跡出土の平瓦と丸瓦

遠江において、まとまった数量の平瓦・丸瓦が出土している寺院跡・瓦窯跡は、5遺跡である。まずは、

これまで報告されている資料を見ていくことにする。

大宝院廃寺 磐田市中泉に所在し、伽藍は検出され、幢竿支柱や礎石、大溝などが発見されている。出土瓦としては、平瓦や丸瓦のほかに、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾などが出土している(磐田市1992、1996、2000)。軒丸瓦は、山田寺式系の単弁八弁蓮華文1種、単弁十弁蓮華文が1種と、川原寺式の複弁八弁蓮華文が3種確認されている。このうち、川原寺式の1種については、篠場瓦窯跡出土のものと同範で、篠場瓦窯から瓦範が移動していることが明らかになっている(武田2007)。軒平瓦は、重孤文(三重孤文・四重孤文・五重孤文)と連珠文が出土しており、これについても篠場瓦窯跡との関連性がうかがえる。

平瓦は、桶巻作りと一枚作りが出土している。桶巻作りには、凹凸面をナデ調整するものと凸面のみをナデ調整するもの、凸面に縦縄叩きが残るもの、凸面に斜格子叩きが残るものが確認される。側面調整は、凸面側を深く削るものと分割断面に沿って全体を削るものがある。一枚作りのものは、凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面には縦縄叩きが残る。側面調整は凸面側を深く削る。

丸瓦は、無段式と有段式が出土している。無段式は杵形模骨を使用しており、凸面には横ナデ調整が施されている。有段式は、段部の屈曲が強く段差が小さいものと、屈曲が緩く撫で肩に近い形状のものが確認される。全体の数量としては、無段式がほとんどを占めており、有段式はわずかに確認できる程度である。

木船廃寺 浜松市東区和田町に所在する。昭和29年の区画整理に伴う工事の際に多量の瓦が発見され、昭

和51年にはトレンチ調査が行われている。本格的な発掘調査が行われていなかったこともあり、不明な点も多かったが、平成22年に開発に伴う発掘調査が実施され、多くの瓦が出土している（財浜松2011）。軒丸瓦は、山田寺式系の単弁七弁蓮華文1種、川原寺式の複弁八弁蓮華文1種、重圏文縁の細弁十二弁蓮華文1種、内区外縁に珠文帯をもつ単弁八弁蓮華文1種の計4種確認されている。軒平瓦は、重孤文（三重孤文）と均整唐草文（平城宮6663形式）、S字文（遠江国分寺式）が出土している。

平瓦は、桶巻作りと一枚作りが出土している。桶巻作りには、凸面のみをナデ調整するものが確認できる。側面調整は、いずれも分割断面に沿って全体を削っている。一枚作りのものは、凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面には縦縄叩きが残る。側面調整は、凸面側を深く削る。

丸瓦は、無段式と有段式が出土している。無段式は、杵形模骨を使用しており、凸面をナデ調整するものとナデ調整せず縄叩きが残るものが確認できる。有段式は、段部の屈曲が小さく撫で肩に近い形状のものと、玉縁部先端に向かって緩やかに傾斜するものが確認される。有段式と無段式は45%と55%で、1:1に近い比率であるとされる。

楠木遺跡 浜松市北区三ヶ日町岡本に所在し、畑から瓦が採取されていたため、以前から寺院の存在する可能性が指摘されていた（註1）。平成22年に試掘調査が実施され、古代寺院に関連する遺構は確認されていないが、軒丸瓦や軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦が出土している（浜松市2011）。軒丸瓦は、雷文縁の素弁十六弁蓮華文1種、雷文縁の素弁十二弁蓮華文1種が確認されている。軒平瓦は、型押し簾状文と型押し小型花文、無文のものが出土している。

平瓦はすべて桶巻作りであり、ナデ調整を施さず斜格子叩きが残るものと、凸面にナデ調整を施すものが出土している。また、凸面にナデ調整を施すものには、斜格子叩きのものと、叩き締め円弧を描く縄叩きのものとが確認できる。なお、花文軒平瓦の平瓦部凸面には、縄叩きの痕跡が残されている。

丸瓦は、いずれも無段式である。杵形模骨を使用するものと、側板連結模骨を使用するものが確認できる。凸面はナデ調整されているが、ナデ残しの部分に残る叩き目は、いずれも縄叩きである。

竹林寺廃寺・南原瓦窯跡 島田市舟木に所在し、昭和50年から実施された発掘調査により、金堂や塔など

の堂宇が検出されており、瓦が多数出土している（島田市1980）。また、寺院に隣接する南原瓦窯跡でも発掘調査が実施されており、竹林寺廃寺に瓦を供給していたことが明らかになっている（島田市1981）。軒丸瓦は、素弁九弁蓮華文1種と素弁十弁蓮華文1種、素弁十六弁蓮華文1種、重圏文縁の細弁十六弁蓮華文1種の計4種が出土している。軒平瓦は、三葉文をスタンプするものと、無文のものが出土しており、顎面に三葉文や波状文を施文するものが多く確認されている。

平瓦は、桶巻作りと一枚作りが出土している。桶巻作りは、凸面をナデ調整するものと、ナデ調整が施されず正格子叩きが残るもの、斜格子叩きが残るものが確認できる。側面調整は、分割断面に沿って全体を削るものと、凸面側にやや深く削るものがある。一枚作りのものは、凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面に縦縄叩きが残る。側面調整は、いずれも凸面側を深く削る。

丸瓦は、無段式と有段式が出土している。無段式には、側板連結模骨が用いられており、凸面にはナデ調整が施されているが、ナデ残しの部分に格子叩きと縄叩きの痕跡が確認される。有段式は、段部の湾曲が緩やかなものと、玉縁部先端に向かって緩やかに傾斜するものが確認される。凸面には、全面にナデ調整が施されているが、ナデ残しの部分に残る叩き目は、いずれも縄叩きである。全体としては、無段式が主体であり、有段式はごくわずかである。

篠場瓦窯跡 浜松市浜北区に所在し、第二東名建設に伴い平成14～16年度に発掘調査が行われている。合計3基の瓦窯が発見されており、3号窯が7世紀末、2号窯が700年前後、1号窯が8世紀初頭に操業していたことが明らかになっている。窯体内や灰原からは、平瓦や丸瓦に加え、軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦・螭羽瓦・鬼瓦・塼・鴟尾などの、大量の瓦が良好な状態で出土している（静岡県2013）。軒丸瓦は、川原寺式の複弁八弁蓮華文1種、重圏文縁複弁八弁蓮華文2種、重圏文縁複弁八弁蓮華文の改範とみられる傾斜縁の内区側に二重の圏線が巡るもの1種の、合計4種である。このうち、川原寺式については、範傷の検討から大宝院廃寺出土のものと同範であり、範傷の増加や調整技法の違いから、篠場瓦窯跡から大宝院廃寺（瓦供給瓦窯）に瓦範が移動していることが判明している（武田2007）。軒平瓦は、重孤文（四重孤、五重孤）と連珠文、竹管文、無文のものが出土している。

平瓦はすべて桶巻作りであり、凹凸面をナデ調整す

るものと、凸面のみナデ調整するもの、凹面のみナデ調整し凸面に叩き締め円弧を描く縄叩きのもの、凹面のみナデ調整し凸面が縦縄叩きのもの、凹凸面ともにナデ調整せず凸面が縦縄叩きのものの、大きく5種に分けられる。側面調整は、凸面側を深く削るものと、分割断面に沿って全体を削るものがある。また、全体を削るものについては、凹面を上にして置いた状態で、時計回りの方向に四側面を調整しており、凹型台を回転させて側面の調整を行っていることが明らかになっている。

丸瓦は、無段式と有段式が出土している。無段式は、側板連結模骨を用いたものと杵形模骨を用いたものがあり、粘土板の形状が三角形のものと四角形のものの2種存在する。有段式は、段部の屈曲が直角に近く、段差が大きいものと小さいもの、屈曲がやや緩いもの、屈曲が緩く撫で肩に近い形状のものの4種が確認されている。全体としては、有段式はごくわずかしき出土しておらず、丸瓦のほとんどは無段式となっている。

東ノ谷瓦窯跡 浜松市浜北区尾野に所在し、篠場瓦窯跡から約1.5km西側に位置する。発掘調査は行われていないが、昭和40年代に瓦や須恵器が採取されている。採取されている瓦は、平瓦と丸瓦、鴟尾であり、軒瓦は確認できない（武田2009）。

平瓦はすべて桶巻作りであり、凹凸面ともにナデ調整するものと、凸面のみナデ調整するもの、凹面のみナデ調整するもの、凹凸面ともにナデ調整を施さず、縦縄叩きが残るものが確認される。側面調整は、凸面側を深く削るものと、分割断面に沿って全体を削るものがある。

丸瓦は少なく、11点しか確認できない。すべて無段式である。杵形模骨を使用し、粘土板巻き付け技法で成形されている。

3 分類

遠江出土の平瓦と丸瓦については、各遺跡の報告書で、叩き目や技法などから分類が行われているが、遺跡（または報告書）ごとに分類の基準が設定されており、統一的な基準はない。そこで、まずは遠江の各遺跡から出土している平瓦と丸瓦について、共通の分類基準を設定することにする。

平瓦 成形の方法では、桶巻作りと一枚作りに分けられる。なお、奈良時代以前の遠江では、凸面布目瓦や粘土紐桶巻作りの平瓦は、現在のところ確認されていない。

次に、凸面の叩き目は、大きくは縄叩きと格子目叩きに分けられる。これに、凸面の全面がナデ調整され、叩き目が認識できないものを含めると3種になる。また、縄叩きは、叩き締め円弧を描く（斜め縄叩き）ものと、縦方向に叩き目が揃う（縦縄叩き）ものに細分できる。

凹凸面の調整は、凹凸両面をナデ調整するもの、凸面のみナデ調整するもの、凹面のみナデ調整するもの、凹凸面ナデ調整しないものの4種に分けられる。

側面の調整は、大きくは凸面側を深く削って、正位置に置いた場合に側面が垂直に立つような形になるものと、分割断面に沿って全体を削り、正位置に置いた場合に側面が内傾するものとに分けられる。なお、凸面側を深く削るものについては、側面全体を深く削るものと、調整が側面全体に及ばず分割断面が残るものが確認できる。しかし、完形の資料をみると、場所によって調整が側面全体に及ぶ部分と及ばない部分があるなど、不安定な要素が大きい。このことは、破片資料の場合、同一個体の破片が、別の分類に分けられる危険性が高いことを意味している。将来完形資料が増加すれば、詳細な分類も可能になるかもしれないが、本稿ではこれらを細分しないことにする。

以上の要素から、遠江における古代の平瓦は、次のように分類することができる。

〔桶巻作り〕

I 類 凹凸面をナデ調整するもの

II 類 凸面をナデ調整するもの

III 類 凹面をナデ調整するもの

III 類 A 凸面が斜め縄叩きのもの

III 類 B 凸面が縦縄叩きのもの

III 類 C 凸面が格子叩きのもの

IV 類 凹凸面をナデ調整しないもの

IV 類 A 凸面が斜め縄叩きのもの

IV 類 B 凸面が縦縄叩きのもの

IV 類 C 凸面が格子叩きのもの

* 側面調整

a 凸面側を深く削るもの

b 分割断面に沿って全体を削るもの

〔一枚作り〕

凹凸面をナデ調整せず、凸面が縦縄叩きのもの

丸瓦 丸瓦は、狭端部の構造から、有段式と無段式の2種存在する。有段式は、破片のものが大半で良好な資料が乏しいが、段部の形態において、屈曲が強い

ものと弱いもの、屈曲が少なく緩やかに傾斜するものなどに分けられる。

無段式は、模骨の構造により、杵形模骨と側板連結模骨に分けられる。叩き目は、削りやナデ調整によって失われているものが多いが、縄叩きのものと格子叩きのものが確認できる。凸面の調整は、削り調整のものと、ナデ調整のもの、無調整のものがある。

以上の点から、遠江出土の丸瓦については、次のように分類できる。

〔有段式〕

I 類 段部が直角に近い形に屈曲するもの

I 類 A 段差が小さいもの

I 類 B 段差が大きいもの

II 類 段部がやや斜めに屈曲するもの

III 類 段部の屈曲が緩く、撫で肩に近いもの

IV 類 玉縁部が先端に向かって斜めに傾斜するもの

〔無段式〕

I 類 凸面を削り調整するもの

I 類 A 側板連結模骨を使用するもの

I 類 B 杵形模骨を使用するもの

II 類 凸面をナデ調整するもの

II 類 A 側板連結模骨を使用するもの

II 類 B 杵形模骨を使用するもの

III 類 凸面が無調整のもの

* 叩き目

a 縄叩きのもの

b 格子叩きのもの

4 平瓦の分布と年代

桶巻作り I 類 凹凸面ともにナデ調整を施す I 類は、篠場瓦窯跡・東ノ谷瓦窯・大宝院廃寺の 3 遺跡で出土している。いずれも共通するのは、側面調整に a を採用している点である。また、凹凸面をナデ調整していることに加え、凹面の側縁に面取りを施すなど、全体を丁寧に仕上げている。

年代の明確な篠場瓦窯跡では、7 世紀末葉操業の 3 号窯では多く生産されているが、これに次ぐ 2 号窯では生産されていないか、ごくわずかであると推定されている。東ノ谷瓦窯は篠場瓦窯跡と近接して立地しており、技術が伝播する年代差は、さほど考慮しなくてよいであろう。大宝院廃寺のものは、他の瓦で篠場瓦窯跡 2 号窯からの影響が強くみられることから、やや年代が降る可能性がある。しかし、いずれにせよ、桶巻作り I 類は、遠江の平瓦では古式のものであり、年

代は 7 世紀末葉に位置付けられる。

桶巻作り II 類 I 類の平瓦に限られた遺跡からしか出土しないのに比べて、凹面のナデ調整が省略される II 類は、篠場瓦窯跡・東ノ谷瓦窯・大宝院廃寺・木船廃寺・楠木遺跡・竹林寺廃寺と、平瓦が一定量まとまって出土しているすべての遺跡で出土している。側面調整は、篠場瓦窯跡では a と b の両者が確認できるが、そのほかではすべて b となっている。叩き目は、天竜川流域の篠場瓦窯跡・東ノ谷瓦窯・大宝院廃寺・木船廃寺ではすべて縄叩きである。これに対し、遠江でも東端にあたる竹林寺廃寺では格子叩きが、西端にあたる楠木遺跡では、縄叩きと格子叩きの両者が確認される。

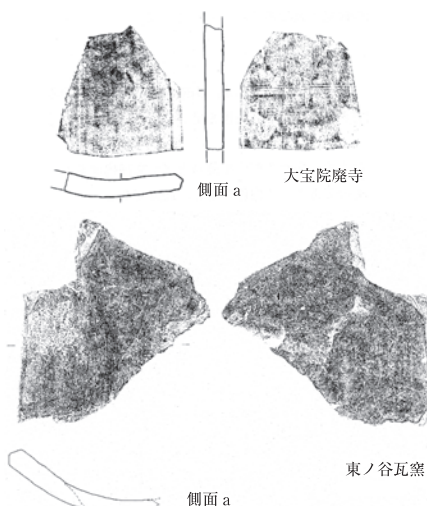
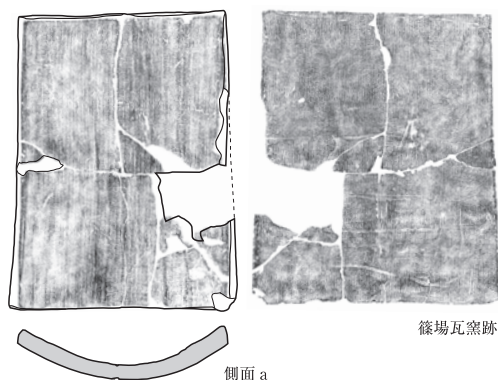
篠場瓦窯跡において II 類は、西暦 700 年前後に操業の 2 号窯と 8 世紀初頭操業の 1 号窯で生産されている。ただし、側面調整で a が用いられているのは 2 号窯のみであり、1 号窯の瓦の側面調整はすべて b である。2 号窯では、a と b の両者が出土しており、その操業期間中に、a から b へと変化したものとみてよい。この側面調整の a から b への変化は、削り調整の角度の問題に留まらない。篠場瓦窯跡では、側面調整が b のものは、いずれも凹面を上にした状態で時計回りの方向に削り調整されており、凹型台に瓦を乗せ、反時計回りに回転させて調整していたことを示している。粘土円筒から分割した後の調整に効率化が図られており、その意味において技法の大きな変化の一つとして捉えてよい。このような技法は、それぞれの瓦生産集団が個別に見出したものとは考えにくく、特定の集団から順次技術が伝播したことによって広がったものとみるのが妥当である。その伝播の過程によって製作年代に多少の差異はあるであろうが、II 類については概ね、側面調整 a のものが 7 世紀末葉、b が 8 世紀初頭から前葉にかけての年代に位置付けられる。

桶巻作り III 類 凸面のナデ調整が省略される III 類は、現在のところ篠場瓦窯跡と東ノ谷瓦窯でしか確認できない。篠場瓦窯跡では、凸面の叩き目が、叩き締め of 円弧を描く縄叩きの A と、縦方向に揃う縄叩きの B が出土している。叩き目だけでなく、側面調整も大きく異なっており、III 類 A が a であるのに対して、III 類 B では b となっている。A は 2 号窯でのみ生産されており、B は 2 号窯に加えて 1 号窯での生産も確認できる。東ノ谷瓦窯のものは、III 類 B であり、篠場瓦窯跡と同じく側面調整は b となっている。

篠場瓦窯跡では、叩き目は明らかに A から B へと変化している。III 類 A は、2 号窯の早い段階を中心に

〔桶巻作り〕

I 類



0 (1:10) 40 cm

II 類

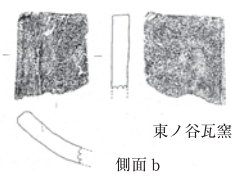
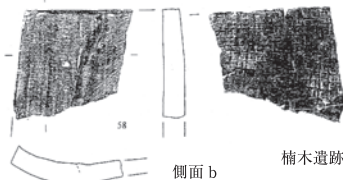
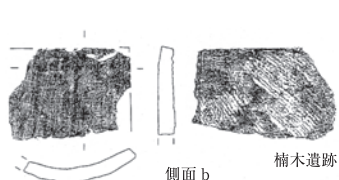
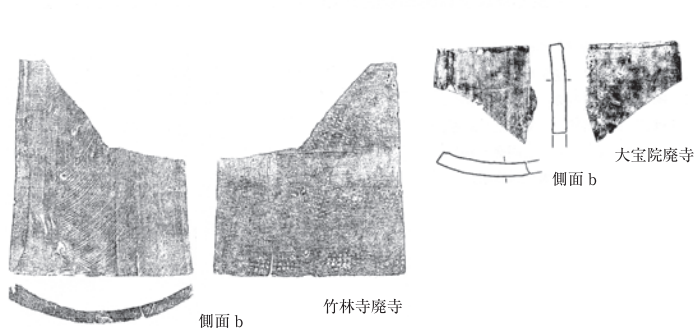
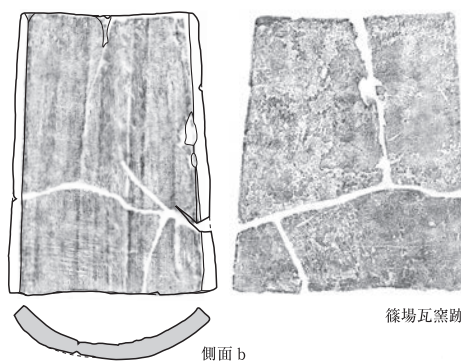
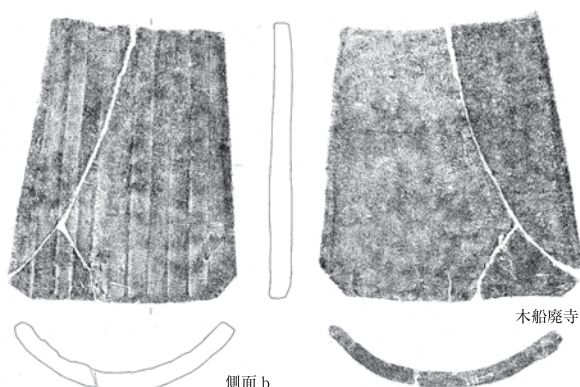
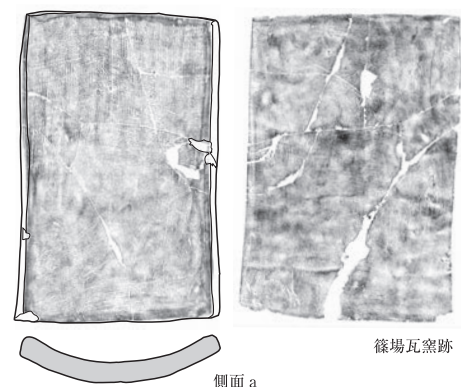


図1 平瓦の諸例と分類(1)

生産されたものとみてよく、側面調整もaであることから、その年代は7世紀末葉に位置付けられる。これに続く篠場瓦窯跡出土のⅢ類Bは、8世紀初頭に生産されたものであり、近接する東ノ谷窯の製品もほぼ同時期であるとみてよい。

桶巻作りⅣ類 凹凸面ともにナデ調整を省略するⅣ

類は、叩き締め円弧を描く縄叩きのA、縦方向に揃う縄叩きのB、格子叩きのCという3種を設定したが、現在のところ出土例の確認できるのはBとCの2種である。Ⅳ類Bは、現在のところ篠場瓦窯跡と東ノ谷瓦窯でしか確認できない。いずれも側面調整はbとなっている。Ⅳ類Cは、楠木遺跡・竹林寺廃寺・大宝院廃

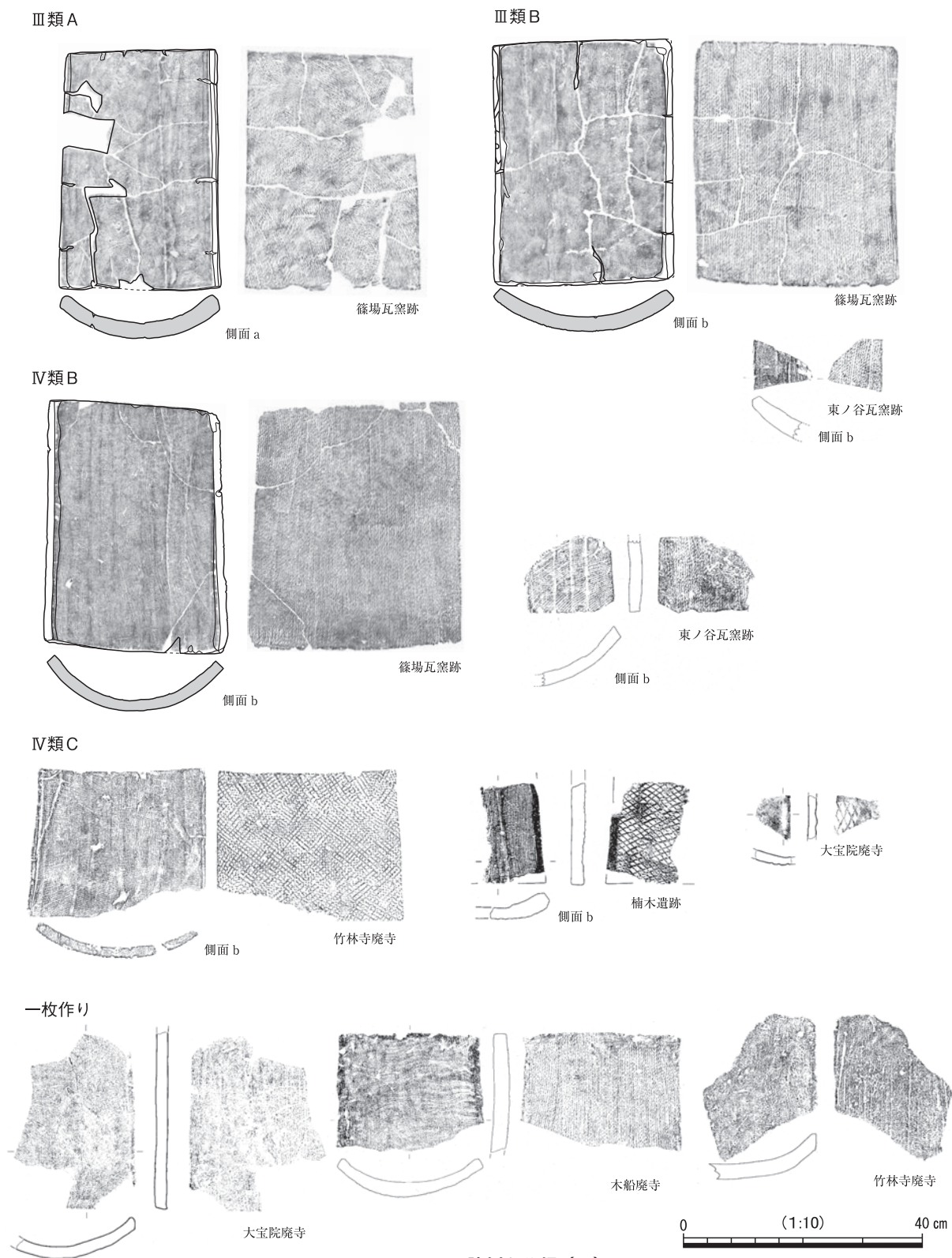


図2 平瓦の諸例と分類(2)

寺の3遺跡で出土している。ただし、楠木遺跡と竹林寺廃寺では、平瓦の主体となるほど大量に出土しているが、大宝院廃寺では小破片がわずかに出土している程度である。楠木遺跡と竹林寺廃寺のものの側面調整

は、いずれもbである。大宝院廃寺では、側端の残る資料が出土していないが、おそらくはbであろう。

IV類は、II・III類よりも、さらにナデ調整の省略が進行している。IV類Bは、篠場瓦窯跡では、1号窯で

〔有段式〕

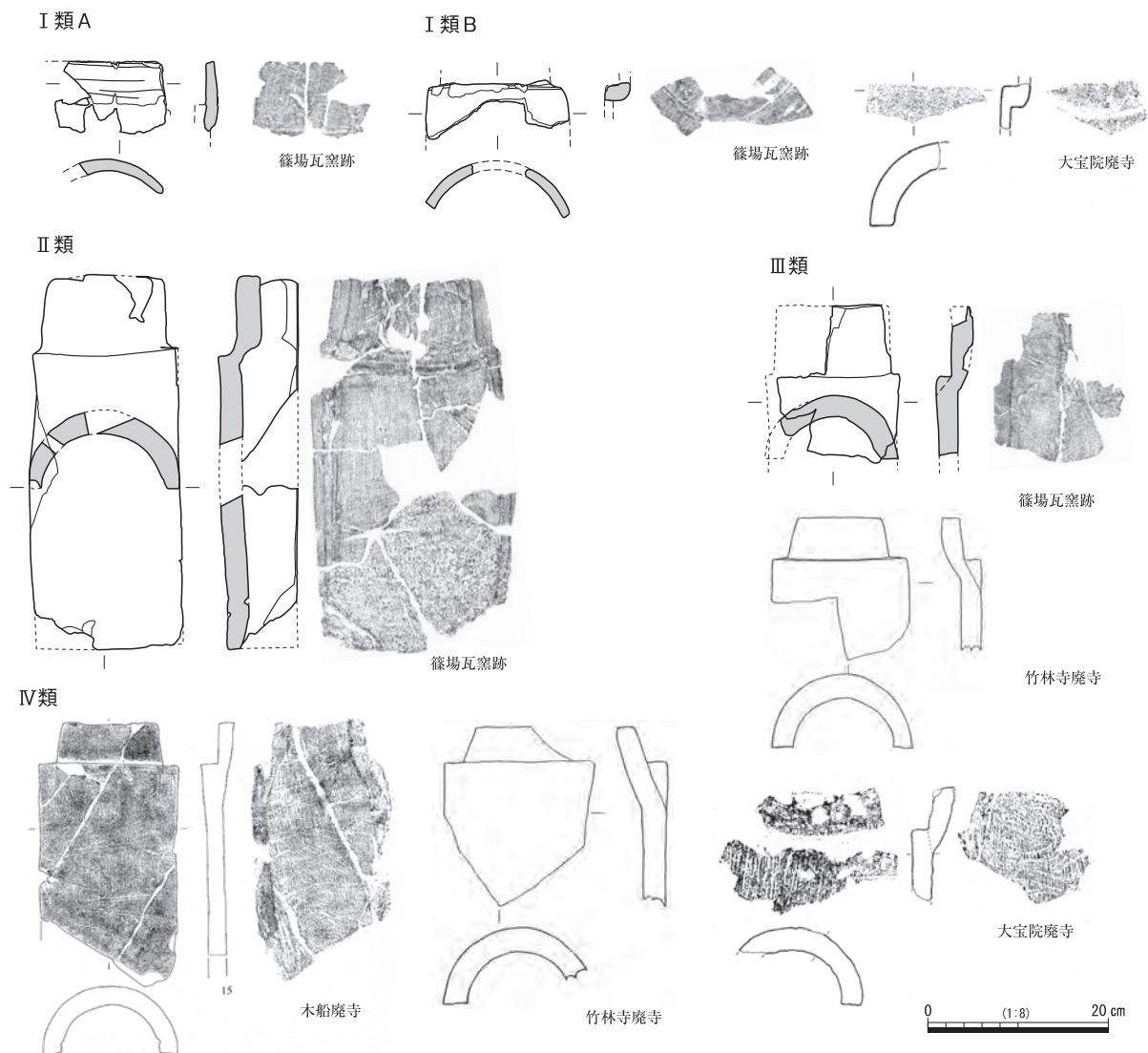


図3 丸瓦の諸例と分類（1）

のみ生産されており、年代としては8世紀初頭に位置付けられる。IV類Cについては、IV類Bと叩き目は異なるが、側面調整は同じbであり、さほど時間的な差異を想定する必要はないであろう。IV類はB・Cともに、II・III類よりもやや年代の降る8世紀初頭から前葉にかけての時期に位置付けられる。

一枚作り 一枚作りの平瓦は、大宝院廃寺・木船廃寺・竹林寺廃寺で出土している。凸面はいずれも、縦方向に揃う縄叩きであり、桶巻作りにおいて格子叩きのものが主体となる竹林寺廃寺においても、一枚作りのものには縄叩きが採用されている。側面調整は、いずれもaであり、凸型台上で成形し、幅を切り揃えていることがわかる。

大宝院廃寺と木船廃寺では、遠江国分寺式の軒瓦が

出土しており、一枚作りの平瓦はこれに伴う可能性が高い。竹林寺廃寺のものについては、年代が不明瞭であるが、いずれも基本的には国分寺建立前後の8世紀中頃から後葉にかけてのものと推定される。

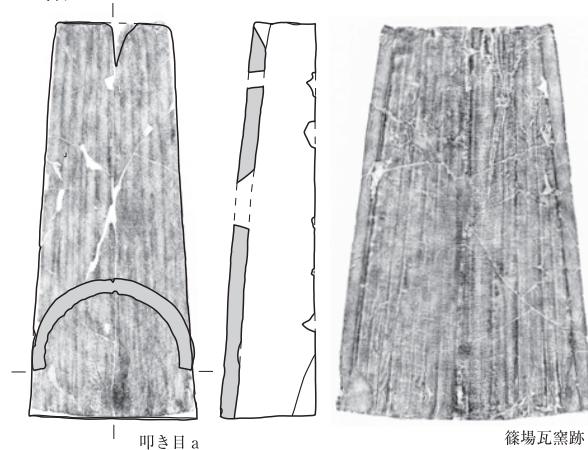
5 丸瓦の分布と年代

有段式 I 類 段部の屈曲が強く直角に近い I 類は、篠場瓦窯跡と大宝院廃寺で確認される。篠場瓦窯跡では、段差が小さい A と段差が大きい B の両者が生産されており、大宝院廃寺では B のみが確認できる。ただし、両遺跡ともに出土点数は少なく、数点程度しか出土していない。

形態からみて、遠江における有段式丸瓦の中では最も古式のものに位置付けられる。実際、篠場瓦窯跡で

〔無段式〕

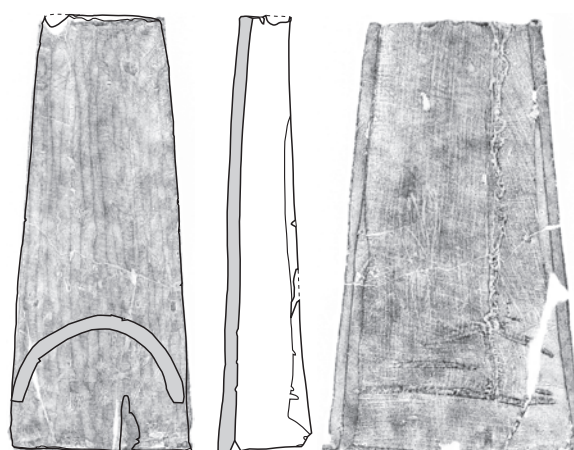
I 類 A



叩き目 a

篠場瓦窯跡

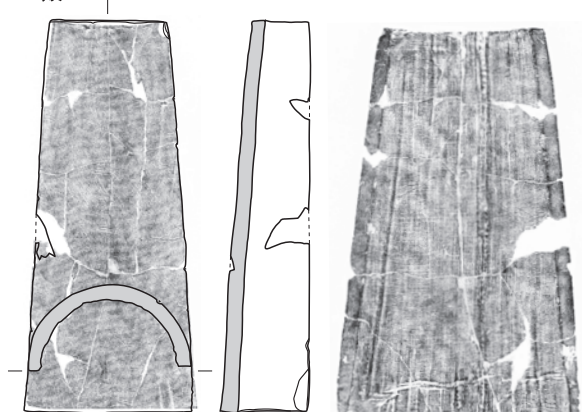
I 類 B



叩き目 a

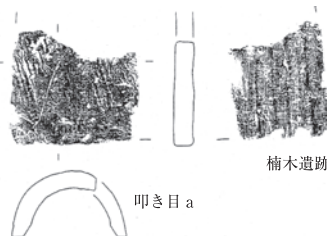
篠場瓦窯跡

II 類 A



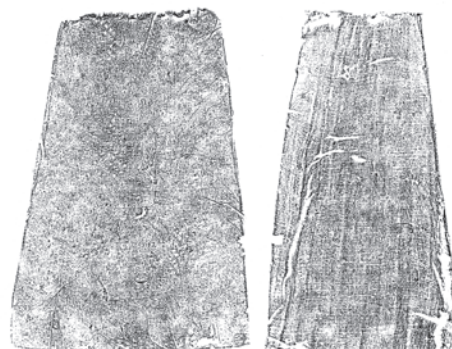
叩き目 a

篠場瓦窯跡



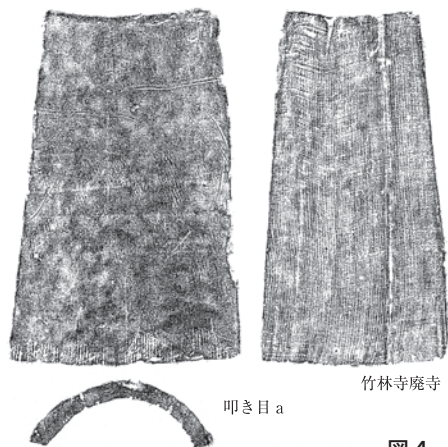
楠木遺跡

叩き目 a



叩き目 b

竹林寺廃寺



叩き目 a

竹林寺廃寺

図4 丸瓦の諸例と分類(2)

0 (1:8) 20 cm

は、最初に築かれた3号窯でのみ確認される。大宝院廃寺のI類Bは、薄手のつくりである点において、篠場瓦窯跡のものと類似しており、技術的にも関連性がある。年代は、平瓦の桶巻作りI類と同様に、7世紀末葉に位置付けられる。

有段式II類 段部がやや斜めに屈曲するII類は、篠場瓦窯跡のみで確認される。I類と同様に、篠場瓦窯

跡における出土点数は少ない。II類は段部の屈曲が直角に近いI類と、屈曲が緩やかになるIII類との中間的な形態のものといえる。篠場瓦窯跡では、2号窯でのみ生産されており、年代は西暦700年前後に位置付けられる。

有段式III類 段部の屈曲が緩く、撫で肩に近い形態のIII類は、篠場瓦窯跡と竹林寺廃寺で確認される。た

〔無段式〕

Ⅱ類B

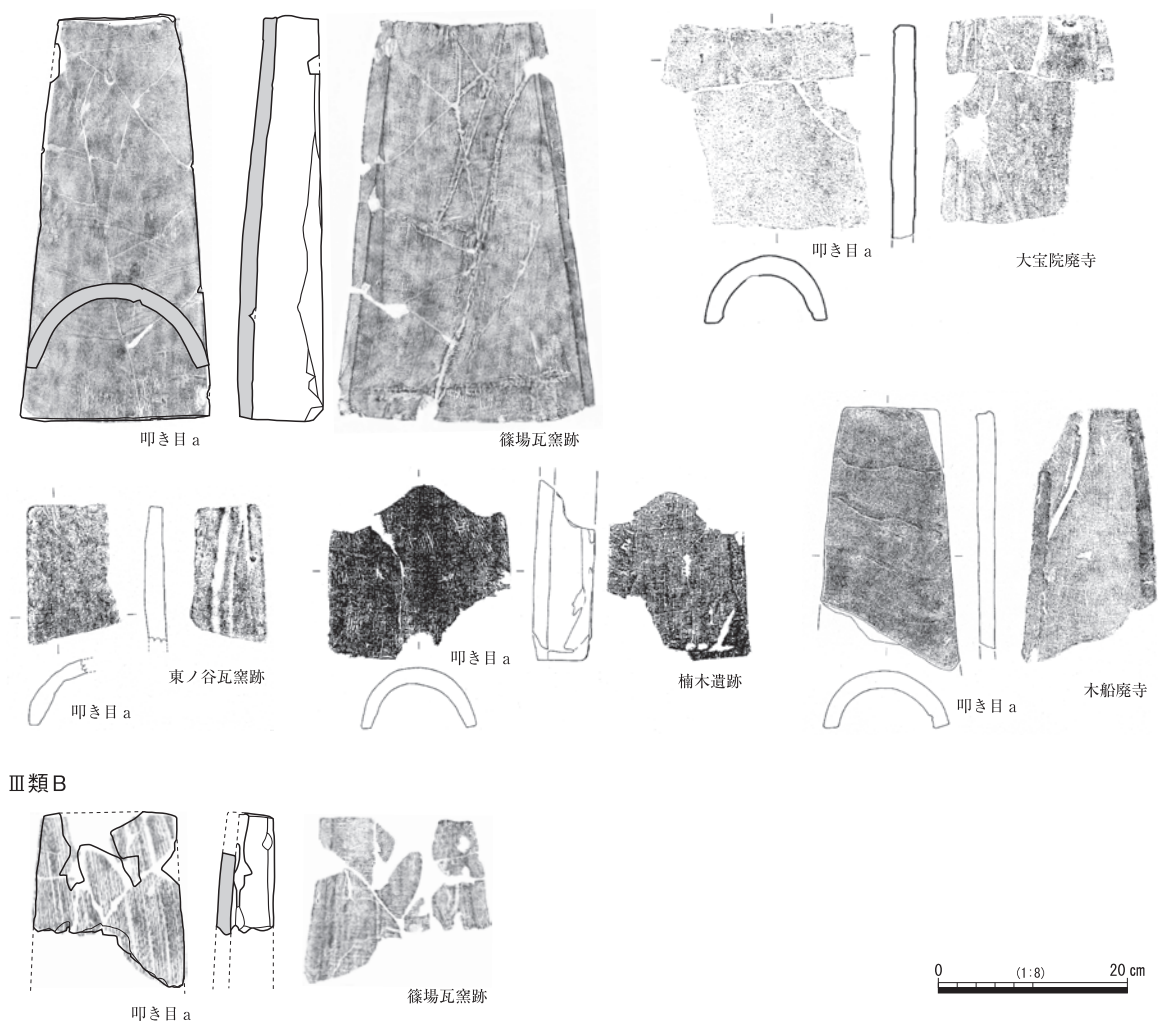


図5 丸瓦の諸例と分類（3）

だし、Ⅰ・Ⅱ類と同様に、いずれの遺跡においても出土点数は少なく、丸瓦全体で主体となるものではない。

篠場瓦窯跡では、最後に操業した1号窯でのみ生産されている。竹林寺廃寺のものの年代は明確でないが、Ⅲ類は、概ね8世紀初頭から前葉の年代に位置付けてよいであろう。

有段式Ⅳ類 段部で屈曲し、玉縁部先端に向かって斜めに傾斜するⅣ類は、大宝院廃寺・木船廃寺・竹林寺廃寺で確認される。大宝院廃寺と竹林寺廃寺における出土量は不明であるが、木船廃寺では無段式とほぼ同等の数量が出土している。

この3遺跡は、一枚作りの平瓦が出土している寺院跡であり、大宝院廃寺と木船廃寺では遠江国分寺式の軒瓦が出土している。木船廃寺において主体となる丸瓦であることから、一枚作りの平瓦に伴うものとみて

よい。年代としては、8世紀中頃から後葉にかけての時期に位置付けられる。

無段式Ⅰ類 凸面を削り調整するⅠ類は、篠場瓦窯跡でのみ確認される。側板連結模骨を使用するAと、杵形模骨を使用するBの両者があり、一定量出土している。ともに3号窯でのみ生産されており、年代は7世紀末葉に位置付けられる。

無段式Ⅱ類 凸面をナデ調整するⅡ類は、多くの遺跡で出土している。側板連結模骨を使用するⅡ類Aは、篠場瓦窯跡・楠木遺跡・竹林寺廃寺で確認できる。篠場瓦窯跡では、Ⅰ類と同様に3号窯で一定量生産されており、叩き目は縄叩きである。楠木遺跡では、縄叩きのものの存在は確認できるが、点数は少ない。竹林寺廃寺では、無段式Ⅱ類Aが出土した丸瓦の大半を占めており、叩き目は縄叩きのものと格子叩きのものの

両者が存在する。

杵形模骨を使用するⅡ類Bは、篠場瓦窯跡・東ノ谷瓦窯・大宝院廃寺・木船廃寺・楠木遺跡と、竹林寺廃寺以外のすべてで出土している。篠場瓦窯では、法量は窯ごとに異なるが、すべての瓦窯で出土しており、特に2号窯と1号窯で生産される丸瓦のほとんどは、Ⅱ類Bである。大宝院廃寺と木船廃寺では、無段式の丸瓦はすべてⅡ類Bである。楠木遺跡では、Ⅱ類Aが少量出土しているが、主体となるのはⅡ類Bである。無段式Ⅱ類は、遠江で主流になっていた丸瓦ということができる。叩き目はいずれも縄叩きである。

Ⅱ類A・Bともに、篠場瓦窯跡の3号窯で出土していることから、7世紀末葉から生産されていたことは確実である。しかし、その生産が終了する時期に関しては明確でない。ちなみに遠江国分寺では、一部を除き基本的には有段式が使用されている。その影響力の大きさは、木船廃寺において、有段式Ⅳ類が丸瓦全体のほぼ半数を占めていることからもうかがえる。Ⅱ類A・Bは、7世紀末から8世紀中頃までを比較的長期間生産されたものとみてよいであろう。

無段式Ⅲ類 凸面をナデ調整しないⅢ類は、篠場瓦窯跡で確認できるのみである。また、篠場瓦窯跡においても、窯周辺の遺構や包含層などから数点出土している程度であり、数は極めて限定的である。明確に存在が確認できることから、分類上1種設けたが、技法として確立したものではなく、偶然性に起因する例外的なものともた方がよい。

6 まとめ

(1) 平瓦の変遷

遠江における桶巻作りの平瓦には、Ⅰ類(凹凸両面ナデ調整)→Ⅱ(凸面のみナデ調整)・Ⅲ類(凹面のみナデ調整)→Ⅳ類(凹凸ともに調整しない)といった、凹凸面調整の省略化が認められる。また、凸面が縄叩きのものには、叩き締め円弧を描くもの(A)から、縦方向に揃う叩き目(B)へとといった変化もうかがえる。

年代は、凹凸面調整と側面調整の2つの要素から推定できる。まず、凹凸面調整においては、Ⅰ類が7世紀末、Ⅱ・Ⅲ類が7世紀末～8世紀前葉、Ⅳ類が8世紀初頭～前葉に位置付けられる。さらに、Ⅲ類には、叩き目がA・Bの両者があり、AはBよりも先行し、概ねAは7世紀末、Bは8世紀初頭～前葉の時期と推定される。

また、側面調整は、凸面側を深く削るaから、分割断面に沿って平行に削るbへと変化する。これは分割した平瓦を凹型台に乗せ、台を回転しての調整に変化したことを示している。遠江全体では、Ⅱ類・Ⅲ類B・Ⅳ類で側面調整bが確認できる。最も古式のⅠ類と、Ⅲ類では古式となるⅢ類Aで用いられておらず、新たな技法の採用であったことがうかがえる。篠場瓦窯では2号窯のⅢ類Bにおいて採用されており、後続する1号窯で主体となるⅣ類では、すべて側面調整はbが用いられている。篠場瓦窯跡における側面調整bの登場は、西暦700年頃に位置付けられており、桶巻作りの平瓦で側面調整がbのものは、基本的に8世紀代の平瓦とみてよい。

一枚作りの平瓦は、遠江国分寺において主体となる平瓦である。大宝院廃寺と木船廃寺では、遠江国分寺式の軒瓦が出土しており、両遺跡ではこれとともに導入された可能性が高い。一枚作りの平瓦は、8世紀中頃から後葉にかけてのものと推定される。

(2) 平瓦の叩き目からみた地域の特徴

篠場瓦窯跡・東ノ谷瓦窯・木船廃寺の平瓦は、凸面の叩き目が縄叩きのもののみで構成されている。大宝院廃寺では、縄叩きのもののほかに格子叩きのものも出土しているが、数量的にはごくわずかであり、格子叩きのものは補完的な瓦としての使用が想定される。いずれも天竜川の流域に位置する遺跡であり、凸面の叩き目が縄叩きである点は、この地域における平瓦の特徴として捉えられる。

軒瓦などにおいても、これらの瓦窯・寺院跡には関連性が認められている。篠場瓦窯跡と東ノ谷瓦窯は約1.5km離れて隣接して営まれており、鴟尾には同じ文様構成が採用されている。篠場瓦窯跡と大宝院廃寺は、川原寺式軒丸瓦や連珠文軒平瓦、螭羽瓦など、篠場瓦窯跡が大宝院廃寺の建立に大きな影響を与えており、大宝院廃寺と木船廃寺では、軒丸瓦(山田寺式・川原寺式)や軒平瓦(国分寺式)などにおいて、強い関係性が認められる。この地域の平瓦に縄叩きが特徴的に分布している背景には、瓦工間の技術交流があったものとみてよいであろう。

一方、楠木遺跡と竹林寺廃寺の平瓦では、格子叩きが主体となっている。楠木遺跡は、軒瓦に三河との関係性が確認でき、国境を越えた三河からの影響が想定される。竹林寺廃寺でも、丸瓦が側板連結模骨で製作されているなど、一部に三河との関係性が認められる。

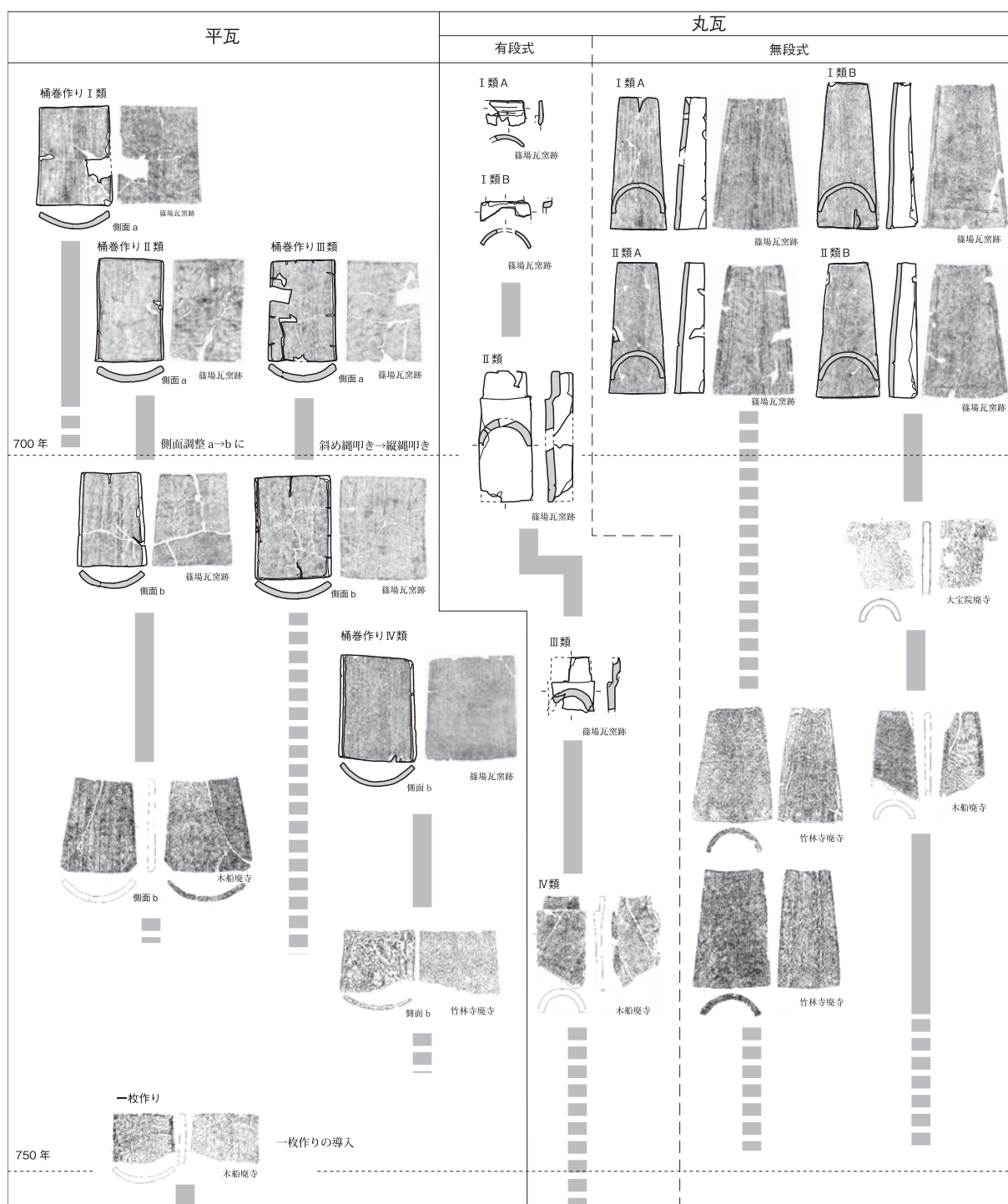


図6 平瓦・丸瓦の変遷

ただし、両遺跡は、遠江でも東西の端に位置しており、相互に直接的な関係を想定することは難しい。同じ三河からの影響であったとしても、それぞれ別のルートを確認していたとみた方がよいであろう。

(3) 丸瓦の変遷と特徴

遠江の有段式丸瓦は、I 類（段部が直角に屈曲）→

II 類（段部がやや斜めに屈曲）→III 類（段部の屈曲が緩やかで撫で肩）→IV 類（屈曲し斜めに傾斜）と変化する。年代は、I 類が7世紀末、II 類が700年前後、III 類が8世紀初頭～前葉、IV 類が8世紀中葉以降に位置付けられる。

無段式の丸瓦については、大きくはI 類（凸面を削り調整）→II 類（凸面をナデ調整）といった流れで捉

えられる。年代としては、Ⅰ類は7世紀末に限られるものの、Ⅱ類は各時期を通じて認められる。ただし、遠江国分寺では有段式の丸瓦が主体となっており、遠江国分寺式軒瓦が出土する木船廃寺において、有段式と無段式の構成がほぼ1:1となっていることから、8世紀後半には遠江でも有段式が主流となっている可能性が高い。このことから無段式Ⅱ類は、概ね7世紀末から8世紀中頃までのものと推定される。

遠江の丸瓦の特徴としては、一つは無段式が主流となっている点があげられる。もちろん有段式が皆無というわけではなく、ほとんどの遺跡において出土が確認されている。ただし、無段式と比べて出土量は圧倒的に少なく、例えば篠場瓦窯跡では総重量にして900kg以上の丸瓦が出土しているが、有段式と認識できるものはわずか15kg程度であり、全体の2%にも満たない。これらは、大棟など特定の場所に限定して使用されたものとみてよい。

もう一つの特徴は、側板連結模骨の丸瓦が確認される点であり、篠場瓦窯跡・楠木遺跡・竹林寺廃寺から出土している。側板連結模骨の丸瓦は、三河地域に多く認められることが以前より指摘されており、三河地域との関係性がうかがえる。特に楠木遺跡は、地理的にも峠を越えれば三河国という場所に位置しており、その影響は軒瓦などにも色濃くあらわれている。ただし、篠場瓦窯跡では、最初に築かれた3号窯でのみ側板連結模骨が使用され、その後は継続せず杵形模骨に統一される。天竜川流域の諸寺院では側板連結模骨が認められないが、杵形模骨に統一された後に篠場瓦窯跡から造瓦技術が展開したことを反映する現象として捉えることができよう。

本稿では、古代遠江出土の平瓦と丸瓦について、形態や技法などから分類を行い、その年代と地域的な特徴について検討を行った。紙面や時間の制約から、歴

史的な背景にまでは考察が及ばなかったが、平瓦と丸瓦の基本的な様相については明らかにできたと思う。少なくとも、「平瓦や丸瓦からは何もわからない」といった認識は、多少なりとも払拭できたのではあるまいか。

冒頭で述べたように、寺院跡や瓦窯の発掘調査では、膨大な数の平瓦・丸瓦が出土する。様々な制約がある中で、それらの扱いには誰しも苦慮するところであるが、整理作業が詳細な検討を行い得るほぼ唯一の機会となっているのが現状である。本稿が、その作業を行う上での一助となれば幸いである。

註

1 楠木遺跡は、これまで論考や集成などで、通称「大昌遺跡」として紹介されてきた遺跡と同じである。

引用・参考文献

- 磐田市教育委員会 1992 『大宝院廃寺』
磐田市教育委員会 1996 『大宝院廃寺遺跡－第7次発掘調査報告書』
磐田市教育委員会 2000 『大宝院廃寺遺跡－第10・11時発掘調査報告書－』
大脇 潔 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集』IX 奈良国立文化財研究所
(財)浜松市文化振興財団 2011 『木船廃寺跡2次』
佐原 真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻2号日本考古学会
静岡県埋蔵文化財センター2013 『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』
島田市教育委員会 1981 『南原瓦窯跡』
島田市教育委員会 1980 『竹林寺廃寺跡』
武田寛生 2007 「遠江における川原寺式軒丸瓦」『研究紀要』13号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
武田寛生 2009 「資料調査報告 東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第21号
浜松市教育委員会 2011 「楠木遺跡1次調査」『平成21年度浜松市試掘調査概要』